

『ドワーフ』帰還の物語：『ホビット』における伝 統的叙事詩の世界観の回復

渡邊，裕子
九州大学大学院人文科学府：修士課程

<https://doi.org/10.15017/1560247>

出版情報：九大英文学．56，pp.71-88，2014-03-31．九州大学大学院英語学・英文学研究会
バージョン：
権利関係：

『ドワーフ』帰還の物語— 『ホビット』における伝統的叙事詩の世界観の回復

渡邊 裕子

序

「冒険なんて厄介で不愉快なものだ」。『*The Hobbit* (1937)』の中でビルボ・バギンズ(Bilbo Baggins)はそう断じている。彼は、J.R.R. Tolkien (1892-1973)の『ホビット』における「その(the)」ホビットであり、作品の hero (主人公)であるが、hero (英雄)ではない。ビルボはたっぷりの食事と平凡な生活を好む反英雄(anti-hero)である。

しかし彼の住むホビット庄の外には、危険や魔法、偉業に満ちた地、エルフやゴブリン、トロールが暮らす伝説で満ちた地、が広がっている。ドワーフの長トリン・オウクンシルド(Thorin Oakenshield)は 12 人の仲間を従え、竜に奪われた祖国及び宝奪還の為の旅を企図する英雄だ。『ホビット』は、彼等ドワーフの旅に巻き込まれたビルボの「行きて帰りし(there and back again)」冒険を描いた作品である。

以上の概要から分かる通り、本作においては二種類の価値観、即ち反英雄的な世界観と英雄的な世界観、の対立が物語の根幹に据えられており、このことは多くの研究者によって認められてきた。Shippey は、英雄的な価値観、またそれが主に表現された叙事詩やサガが、現代の読者には受け入れ難いものであること、それらはアイロニーをもって扱われる傾向にあることを前提とした上で、ビルボは現代的な意見を代表する存在、現代人と英雄世界の間の仲介者であるとしている。彼はまた、トールキンが作中において二つの価値観を均等に扱っていることを例証し、最終的にはビルボとドワーフがそれぞれの言葉遣いで同じことを喋ることによってその平等性が示されているのだと述べる。結末における両者の融和を明らかにしている点で Shippey の指

摘は興味深いものだ。しかし彼の論では、結末において平等性があらわされているという結果だけに焦点が当てられ、なぜ、またはどのように登場人物達が変化した為に和解が生じたのか、物語全体の流れにおけるその過程の考察が欠如している。更に本作においては、Shippey が仮定するほど価値観の均衡は保たれておらず、むしろビルボの側により多くの共感が集められていることも見逃せない。つまり和解において重要なのは、それまでドワーフに懐疑的であったホビットがなぜ妥協を示すに至ったのかということ、及び彼の変化を中心に考えてこの和解の意味は何であるのかということである。本論ではこの疑問に答える為ドワーフの「帰還」というモチーフに注目する。

ビルボが冒険に出、故郷に戻ってくる、という構図ほど、ドワーフが祖国に戻らんとしているという枠組みはこれまで重視されてこなかった。しかし彼等の帰還の旅は物語の主軸である。加えて彼等の国の再建が神話史を軽視する湖の町の人間にとって、伝説との関係の回復をも意味することは興味深い。更に重要なことは、そもそも彼等が故国に戻る事ができるかどうかは彼等に対するビルボの評価のあり方と連動していると考えられることである。これらの点に基づき本論では、「ドワーフが国に帰還し、復興を果たすことは、現代人に対して叙事詩的（英雄的）世界観の立場が回復・向上したことを象徴する」と仮定する。本論では3つの節によってこの結論を導きたい。第1節では作品におけるビルボへの共感とドワーフへのアイロニカルな視点を確認する。次に「帰還」というモチーフをめぐってドワーフの英雄性に曖昧さが生じていること、それが彼等に対するビルボ的懐疑とも結びついていることを指摘する。最後に、結末部においてドワーフの異なる側面が徐々に明らかにされることで曖昧性が消失し、それに伴うビルボの変化と共に帰還の達成、国の再建が行われていることに注目したい。

1 ホビットへの共感・ドワーフに対するアイロニーの創出

まずはじめに本作における二種類の価値観について再確認しよう。一方にあるのはビルボの体現する現代的なものである。ホビット族は作中の他の種族と比べて肉体的に脆弱・卑小であり、動物の言語を解するような能力も持っていない。彼等は基本的に魔法や超自然的な力とは無縁である。ビルボは

ホビット庄の外の、伝説あふれる世界ではよそ者として描かれ、そこにおいては「ホビット」という種族を知らない者も少なくはない。もちろんホビット族は作者創造の伝説的な種族であるのだが、上記の点から彼等は神話や物語に属するものというよりは現代の我々に近い存在であると言える。冒頭でも述べたようにビルボは冒険また冒険を行おうとする人物に懐疑的である。無論全ての現代人が同様の考え方をするというわけではないが、少なくともトールキンは、彼の同時代人達が英雄（物語）に対してホビットと似た考えを持っていると感じていたようだ。¹その一方で著者自身は特に北欧のサガ、古・中英語期の伝説詩に深く影響された一人として知られている。Anderson が注釈するように、²ドワーフは北欧古典との結びつきが強い。13 人のドワーフの名前はほぼ全てが the *Elder Edda* よりとられていることや、竜と宝、復讐といったモチーフの使用がそれを裏付けている。実際旅の仲間全員が必ずしも格式を守る訳ではないのだが、少なくともトリンは自身が「重要な (important)」ドワーフであるという認識のもと、それらしく振舞おうとする。彼の大仰な自己認識やもって回った言葉遣い、実現困難な大望を抱く様は叙事詩の英雄と共通するものと言えよう。

以上のように本作には「通常の」我々のものと似た価値観と、叙事詩の示す英雄を中心に置いた世界観の対比が窺える。この対立項から考えると読者がビルボの側により共感を抱き易いと判断することは自然であるかもしれない。加えてビルボは冒険などの実際性に不審を抱きつつも、その実不可思議な物語を好み読み聞かしているという点で読者としての側面を有しており、かつ彼のこの好みは『ホビット』の読者と共通するものだと考えられる。ビルボは物語が進むにつれ旅の一行の主導権を握るようになる。ドワーフは小さなホビットに頼りきりになる。物語の展開だけでも読者は容易にホビットをドワーフの優位に立たせるだろう。本論ではこの点を敷衍する為に語りの

¹ トールキンは自身創作の、純粋な（つまりホビットを用いない）叙事詩群・神話体系の需要には疑問を抱いていた。これは作品の出来栄え如何という以上にそれら物語の世界観が読者にとって受け入れ難いものだという認識に立脚したものと考えられる。

² 本論は Anderson による注釈版、*The Annotated Hobbit* (London: Harper, 2003) に依拠している。ここからの引用は全てページ番号のみ記す。

側面からもビルボへの共感が創出されていることをみたい。ここで特に注目したいのは語り手による読者への呼びかけである。

『ホビット』の語り手‘I’は頻繁に読者‘you’へ語りかける。これはもともと本作が子どもの為の物語であったことから生じたもので、トールキンは後にナイーヴな子どもの読者を想定したこの呼びかけの存在を嫌いテキストから削除している。しかし実際には幾つか残されたままになったことから、作者は呼びかけが持つ効用にも十分注意していたことが窺えるであろうし、またそれは「子どもの為の」効果には限らなかったかもしれない。Lodge はテキストの中に組み込まれた「読者」について、作者が実際の読者の反応を調整する際に用いる一つの手段であると述べる。確かに、物語中「読者のあなた」と呼びかけられれば、読者はその語りかけで想定されている「あなた」にひとまず同化しようとするだろうし、それによって作者は少なくともある程度まで読者を規定することもできるだろう。本作においては‘you’はビルボと同じ立場に置かれることが多い。例えば、ドワーフの大きな魔法の扉が外側から隠されている方法がビルボには全く見当がつかないことに対して語り手は、“He was only a little hobbit you must remember” (53)と口にする。つまりビルボの伝説世界に対する無知を許すよう語り手は求めているのだが、実際にはトールキンの物語世界に初めて接する読者もまたどのような仕方でも扉が隠されているの知るはずもないのだ。ここでは、逆説的ではあるが、ビルボの無知と読者の無知が同等のものとされ読者はビルボに同化される。作中にはより直接的にも同種の効果を意図した‘you’が散見されることから、ビルボは「読者」の代表者として機能し、かつ「読者」はビルボに寄り添って物語を眺めることが期待されると言えるのだ。

ビルボに対するのとは反対に、ドワーフにはアイロニカルな視点が導入されている。前述した通り彼等はビルボに依存し始める。トリンはゴブリンの首領に卑屈な態度をとる反面、命まで脅かすことのない森のエルフ王の前では尊大に振舞う。彼等の口にする大いなる野望と実際の行動の差は大きい。まるで叙事詩が描くような真に偉大な英雄など存在しないことを裏付けるかのようでもある。‘you’を用いた最も明確なアイロニーの例はトリンの大仰な語り口に対してみられる。語り手は彼の長広舌にコメントする。

You are familiar with Thorin's style on important occasions, so I will not give you any more of it, though he went on a good deal longer than this. It certainly was an important occasion, but Bilbo felt impatient. By now he was quite familiar with Thorin too, and he knew what he was driving at. (267)

ここであげた例は竜の巣穴前におけるトリンの演説に続くものである。トリンの言を要約すれば、竜の巣へ最初に調査に行く危険な仕事はビルボの仕事ということになる。語り手は彼の演説を短くすることで、もって回った言葉の裏の空虚さを伝え、それに関する同意を「読者」に求めていると言える。また続くビルボの台詞では彼がトリンの語りを故意に真似て揶揄していること、ここにおいても‘familiar’という単語を介してビルボと「読者」が同等の立場に置かれていること等も重要であろう。トリン自身は彼がみせているギャップには気づいておらず、この状況は彼に対する皮肉を生みだしている。作品の大部分において、「読者」をも巻き込む、ビルボへの共感とドワーフへのアイロニーの感覚はこのように創造されているのである。

2 「帰還」の二重性

‘Farewell, wherever you fare, till your eyries receive you at the journey's end!’ これは『ホビット』における鷲の正式な別れの挨拶であり、巣＝（鳥にとっての）家に戻ることに言及がみられる。他にも the Last Homely House と呼ばれる館の存在、ビルボが旅の間ずっと自分の故郷を焦がれることなどを通じて「家(home)」のモチーフに焦点があてられている。

しかし登場人物は「家」をめぐる二種の型に分類できる。一つは、ここでは fairy-tale-hero 型と呼ぶもの、今一つは epic-hero 型である。³

トールキンは“On Fairy-Stories” (1964)において妖精物語は妖精国(Faërie)についての物語であるとし、その地に迷い込んだ普通の人間の冒険を描いたも

³ これらの呼称は便宜上のものであり全ての妖精物語、叙事詩を定義づけるものではない。また用語の選択については、“Frodo and Aragorn”における Flieger の論 (*The Lord of the Rings* (1954-55)中のフロドとアラゴルンを各々 fairy-tale hero, epic/romance hero と呼び、それぞれの特徴、あるいは典型的な特徴の交換に関する) にも示唆を受けた。

のこそ興味深い物語だと述べている。彼の定義に基づきかつ「家」という概念を中心に考えると、妖精物語の主人公は家を彼の通常の世界に保持したまま異世界で冒険し、最終的には元の世界、家に戻ることに前提とされる。この最も完成された形は“Smith of Wootton Major” (1967)にみられるが、ビルボがこの種の主人公に分類されることは言うまでもない。

しかし彼の「行きて帰る」構造が注目を集め易い反面、本作には別の「帰還」、「家」が描かれていることも見逃せない。ガンダルフ(Gandalf)はビヨン(Beorn)が“The day will come when they will perish and I shall go back!” (165)と口にするのを耳にしている。ここでの‘they’が誰を指すのか、ビヨンがどこに戻ろうというのか詳細な情報は与えられない。しかし彼が何者かに故郷を奪われたこと、しかしそこに帰還することを望んでいることは明らかである。*The Silmarillion* (1977)、即ちトールキンの純粋な神話伝説においては、エルフを筆頭に、故郷を奪われ（追い出され）そこに焦がれながら戦い続ける英雄達が描かれる。彼等は必ずしも故郷を取り戻す為に戦っている訳ではないのだが、根無し草という印象は英雄に悲劇性を付与し、彼に関する叙事詩の一属性として不可欠な役割を果たしていると言える。『ホビット』においてはこの種の人物にあまり焦点はあてられていないが、were-bear であるビヨン、南方からの勇敢な人間(the bold men from the South)、谷の国の王の末裔バード(Bard)等、故郷を奪われその為に戦う存在が確かに描かれているのである。

国を失くし取り戻す為に旅するという点で、ドワーフが叙事詩型の英雄であることは疑いない。しかし偉大な英雄へのビルボの不信感を反映するかの様に、彼等は「帰還」というモチーフ、及び「英雄性」に曖昧さを生じさせていると言える。彼等は竜に復讐し、国を取り戻す(“bring our [the dwarves] curses home to Smaug” (57))という野望を掲げつつも、その実今一つの願いである宝の回収により関心があるようなのだ。言い換えれば、宝さえ手に入れば故郷に戻らずとも良いという仄めかしが確認できるのである。

第一に疑いを生じさせるのは、彼等がトロルの財宝を誰にも見つからぬよう呪文と共に隠す場面だ。ドワーフはここで万一戻って来て宝を回収できるかもしれぬと考えている。しかしホビット庄近くのこの遠方の地に彼等が再び戻って来るのだろうか。無論全てが落ち着いた後なら宝回収の遠征を計画

する余裕は生じるだろうから、彼等の行動が完全に不自然だとは言えない。加えてこの場で重要なのは宝に“a great many spells” (83)をかける彼等の貪欲の強調であろう。けれども同時にドワーフが故郷に落ち着くのではなく、来た道を引き返して来る可能性も排除できないのである。ビヨンもまた一行が道を戻って来る可能性を仄めかす。彼は別れ際一行に、“my house is open to you, if ever you come back this way again” (183)と約束する。同様に森のエルフ王は彼等が竜と戦うことなく宝を持って逃げて来ると予測している“No treasure will come back through Mirkwood without my having something to say in the matter” (253)。ビヨンの場合単なる社交辞令と受け取れるし、エルフ王の推測に関しては賢いものと言われる反面、完全に正しいという訳ではないとここでは語られている。しかし彼等が仲間とするビルボが‘burglar’と呼ばれること、竜のいない間に実際に宝を幾つか持ち逃げしていること等、個々では不自然でなくとも、全体としてドワーフは本当に宝だけでなく故郷を取り戻す為に旅をしているのかどうかに曖昧性が暗示され続けているのである。

彼等の二重性は「武勇精神」(竜と戦い故郷を取り返す為文字通り奮闘すること)と(宝のみ欲する)「貪欲さ」という二つの属性から成り立っていると仮に考えられる。トリンの場合これらは各々剣オークリストと至高の宝石アルケンストーンに具現化されていると言える。トロルとの争いの後彼が剣と宝を同時に手に入れている点は注目に値する。トロルと文字通り(と言ってもすぐ敗退するが)戦った彼は前述の通りここでは宝をひとまず諦め、伝説に名高いオークリストのみその身に帯びる。しかし彼の剣の使用が明示されるのは霧の山脈でゴブリンに捕らわれた時だけである。確かに彼はここで首領に卑屈な態度をとるが、剣と自制心を回復した後には敵に対して武力を示している。尤もこのことにより彼が故郷の為奮闘しているということに直接的にはならないかもしれないが、一つの要素として、故郷に向かう旅路での戦闘における能力の保有は、彼の英雄性を考える上で重要な側面だろう。しかし霧の山脈以後彼が武勇をあらわす描写はなく、それどころかエルフ王に対し、特に宝についてひた隠しにする為頑なに旅の目的を秘密にすることで、トリンは再び捕らわれの身となり剣は王によって没収されてしまう。故郷の

入口にあたる湖の町では、一方でドワーフの伝説的な宝が人々によって強調されるものの、トリンは山の王としての威厳を示している為二つの属性の均衡が保たれていると言える。しかし実際に故郷である山(the Lonely Mountain)、現在は竜の住処と化しているその場所に到達すると、湖の町での高揚は萎え、一行は宝を盗まれたことに気づき憤慨する竜に恐れを抱く。トリンがアルケンストンの話題を持ち出すのは竜の攻撃から身を隠している時で、この後再び竜の脅威を目の当たりにした彼等は偶然にも（正確には竜は彼等が知らぬ間に殺されたので偶然ではないが）竜がいない間に宝を手にし、持てる限りを持って山から少しでも離れた場所に逃れようとしている。全体的にみれば、「家」の為の武勇心よりも貪欲さが勝っていると分かるだろう。別の考え方をすると、帰郷の為奮闘する悲劇的な英雄のふりをしながらその実、宝のみを持ち出し別の「家」、場所に戻る、即ち一種の妖精物語的主人公の側面を匂わすドワーフは、歪んだ叙事詩英雄という姿を提示しているのである。⁴

以上のようにドワーフは帰還というモチーフにおいて英雄性に曖昧さを生じさせているのだが、これが彼等の性質のみに起因するものでないことは重要である。確かに彼等が竜に怯える一方宝に貪欲であることは彼等自身が示す特徴だと言える。しかし先に挙げた通り彼等は英雄としての一側面、つまり戦闘における勇猛心も有しているのだが、語り手はこれを隠蔽していると考えられるのだ。霧の山脈での戦いは実際に描かれるよりも長かったことが仄めかされているが、第二の戦いが始まる前にビルボは気を失いこれを目撃していない為、語り手も後に些細な言及を示すだけに留めている。主人公がホビットである以上ここで仲間とはぐれた彼の別の冒険に重きを置くことは不自然ではない。しかし結果的にドワーフの英雄としての側面は提示されずに終わっている。またビルボを通じて、武を振るう英雄の存在の可能性が否定されていることも重要だ。語り手は彼が竜の巣穴へ一人で向かう途中に立ち向かった戦いを「本当の戦い(the real battle)」と呼ぶ。これは彼が竜と直接

⁴ 繰り返すが本論で用いる叙事詩・妖精物語の定義は暫定的なものである。例えば全ての英雄が家を失った状態から冒険を始める訳でないことは言うまでもない。この定義はトールキン作品における傾向及び『ホビット』内にあらわれる「家」をめぐる二種のイメージに基づき本作を論じる便宜として用いるのみである。

対峙したものでなく、彼が自身の恐怖心に対し繰り広げたもので、Shippeyはこれを、現代人も真似できるモデルと位置づけている。つまり現代の読者にとって実際の強大な敵に立ち向かう英雄の戦闘より、自身の弱さに向き合う戦いの方が大いにあり得ることであり真実味 (reality) を持つことなのだ。

更にドワーフの食欲さにも注目したい。彼等が宝を愛でることに種族としての誇りも混じっていることは注目に値する。鉱物を扱うドワーフの技術は名高い。トリンが故国の宝を眺める時そこには食欲だけではなく一族への想いが込められている“about which [the treasure] were wound old memories of the labours and the sorrows of his race” (323)。宝への執着は、一族に対する、言い換えれば「家」に対する誇りと繋がっているのだ。しかし作中ではエルフ王や特に湖の町の市長を通じて、宝への愛着と愚かしさや純粋な欲深さとの関係が際立っている。またビルボが自身に過度のプライドを抱く時、彼が程々に戒められていることも考慮すべきである。英雄が過剰な自己意識に陥る時彼はそれによって罰を受け多くは死に至る。しかしその場合死は、英雄の愚かしくも不屈の自尊心がもたらす不可避の結果として、彼のなす偉業と同様厳かに語られるものである。言い換えれば英雄の自尊心は高貴な誇りとも呼べるものなのだ。ドワーフの場合も宝をめぐる彼等の繁栄が竜の襲来の一原因であり、このこと自体十分悲劇的で、またトリン一行の旅という叙事詩の基盤を創造してもいる。一方でビルボが、例えば竜の唯一の弱点を見つけだしたことに有頂天になる時、彼は程々に怪我をし、ただ愚かだったと反省させられている。また隠密に行動できる能力を自負する時に、トロルの財布を盗み出そうとして当の財布が喋りだして露見するといった滑稽な仕方で罰を受けてもいる。つまりビルボの体現する現代的な価値観からみれば、過剰な自負心は単に持つべきでないものであり、愚かでありながら高貴な誇りなど存在し得ないのである。ビルボ的なこの考え方が中心におかれた本作では、ドワーフの宝への執着も、彼等の自尊心のあらわれ、壮大な悲劇の土壌、ではなく、ただの食欲さとしてのみ、より自然に提示されているのだ。ドワーフの英雄としての未熟さが彼等の性質によるものであることは否定できない。しかしその未熟さが、ビルボの存在を通じて際立って印象づけられ

ていることもまた見逃してはならないのである。

3 叙事詩の世界観の回復

ドワーフは現代的価値観が英雄に抱く不審に歪められた存在である。しかし結末部において、即ち竜退治、黄金をめぐる争い、五軍の戦いと順をおって、彼等の異なる様相が徐々に明らかにされ、曖昧さが解消されていることを以後考察したい。まずは竜退治の場面である。

物語としては些か風変わりなことに、旅の一行の目的であった竜退治は、彼等によってではなく、突如として登場する英雄バードによって果たされる。更に特異なのは、その出来事がビルボによって目撃されていないにも拘わらず詳細に記述されている点である。Thomas は本作における語りのトーンの変化に注目し、この場面を変化の一つの基点としている。彼によれば、ビルボの、内に閉じこもった(domestic)視点を放棄し、より多くの視点の広がりを持つ語りを展開するようになった語り手は「散文叙事詩の語り手」の特徴を持ち始めている (Thomas 179)。

竜退治のエピソードは、「善」の側に属する存在が作中初めて実際に死を経験する出来事であり、その点においてもこの場面がそれまでの出来事とは異なる様相を持つことは明らかである。加えてこの場面ではトールキンが北欧古典の貢献と呼び賞賛した「勇気の理論」精神の反映が確認できる。

One of the most potent elements in that fusion [of old and new ethos in *Beowulf*] is the Northern courage: the theory of courage, which is the great contribution of early Northern literature. This is not a military judgement. [...]. I refer rather to the central position the creed of unyielding will holds in the North. [...]. At least in this vision of the final defeat of the humane (and of the divine made in its image) [in the Northern myth], [...], we may suppose that pagan English and Norse imagination agreed. ("The Monsters and the Critics" 20-21, emphasis added)

「勇気の理論」を簡単に要約するなら、敗北を前提とする戦いにおいて、死後の救いの可能性もないまましかし自己の意思を貫き戦うこと、そして最後

には死ぬこと、がその最も完成された形ということになる。この最たる例は北欧神話におけるラグナロクであろう。これはビルボが「本当の」戦いでみせる勇気よりも絶望を基調とすることに一つの特徴がある。作者は現代的な勇気と同様、北欧の英雄達が示す勇気に感銘を受け *The Silmarillion* や *The Lord of the Rings* に反映させている。

『ホビット』はその基本トーンがビルボの創造するコミカルさである為に「勇気の理論」の表現が難しい物語だと考えられる。例えば敵に追いつめられたガンダルフの決死の特攻は、鷲の救出によって妨げられている。魔法使いの死はこの喜劇的作品には相応しくないものであろう。⁵竜退治においても英雄は最終的に竜に勝利する。しかし前述した通りここでは人々が殺され、湖の町は破壊され、竜が死んだ後も家を失くした更に多くの人々が冬の寒さで命を落としたと言われる。バード自身戦いの最中ほとんど竜に圧倒されており、少なくとも絶望的な戦いであつたことは間違いない。故に最後の一本の矢になるまで強大な敵に立ち向かい続けた彼の態度は北欧の勇気の一表現と言えるものだろう。このエピソードにおいては、敵に実際に立ち向かう英雄の姿が確かに描かれているのであり、それはまた、これまでのビルボの懐疑的な視点を通じてではなく、そのままの姿で提示されているのである。英雄の異なる様相をここで垣間見ることができる。

バードはドワーフの国同様竜に滅ばされた谷の国の王の末裔だと説明される。彼は竜との戦いという武勇の場において、ツグミの言葉が理解できるというかつての谷の国の人間のアイデンティティを回復し、竜の亡き後国の再建を構想するようになる。ここに一人の叙事詩英雄の姿が確認できる。しかしバードについては、竜が突如襲撃してきたという出来事が彼に武勇の機会を与えているのであって、そもそも彼が故郷を切望しその為に悲劇的な戦いが起きたという構図は顕著ではない。ここではニュートラルな人物によって英雄の側面がひとまず示されたということだと考えられよう。

物語は竜の襲撃に対する補償を求める湖の人間と、要求を拒み山に籠城す

⁵ 因みに本作においてガンダルフの故郷に全く言及はないが、彼がさすらいの魔法使いであることが家を失くした英雄と近いイメージを彼にも与えているとも考えられる。

るドワーフとの黄金に関する諍いの場面に移る。バードとトリンの、回りくどいとも言える複雑な対話の応酬は、竜退治の場面における（例えばバードが代々継承されてきた一族の矢に向かって語りかけるなどの）儀式張ったハイトーンを持続させるものである。ここでは以前みられたような、格式を重んじる口調への揶揄は確認されない。

ドワーフの黄金への執着が彼等の貪欲さに由来することは否定できないが、この場においてその貪欲さのもう一つの側面、即ち「家」に対する高貴な誇りのイメージも顕在化し始めていることは興味深い。竜の死後湖の人間が宝を目的に山に向かっていていると聞いたドワーフは、改めて故郷に戻る為の呼号をあげる(“Back to the Mountain!” (318))。先に引用した、宝と先祖の記憶の繋がりに関する言及も彼等の籠城中におけるものである。至高の宝石アルケンストーン自体も「家」との結びつきが強い。その宝玉がトリンの単純な貪欲さの象徴と考えられることは既に述べた。彼はその石を他のどんな宝よりも高く評価しており、仮に最初に宝を目にした時、つまり竜のいない間に幾つか宝を持ち出した時にアルケンストーンを見つけていたとしたら、彼は迷わずそれを持って、来た道を引き返し始めたかもしれない。心を狂わせる至高の宝石のモチーフは特に *The Silmarillion* のシルマリルが顕著なものだが、アルケンストーンもこの一例だと言える。しかしシルマリルがそれを作ったエルフの誇りとも関わっているのと同様、トリンの宝玉も単に貪欲さを掻き立てるだけのものではない。彼がアルケンストーンに言及するのは、一行が竜に怯える時であると同時に、作中初めてトリンが山の内部に足を踏み入れた時のことでもあるのは注目できる。アルケンストーンは故郷である「山の心臓(the Heart of the Mountain)」とも呼ばれ、トリン一族に代々伝わるべき継承の品である。つまりその宝玉がバードの手に渡ったことを知った時ドワーフの怒りが増大するのは、一族の誇りを傷つけられたが故のことだとも考えられるのだ。

今やドワーフが宝を守ることと山を守るとは連動している。彼等にとって黄金に執着することは「家」を守ることと文字通り同義になり始めているのである。無論これは竜の死を前提としたものである上、結果的にそうなったに過ぎないという側面は否定できない。しかし少なくとも故郷に対する彼等の曖昧さは薄れつつある。彼等は自己の誇りたる宝、そして家を守る為に

死ぬまで戦うことを厭わないであろう。

けれどもここで付記しておかなければならないことは、竜退治の時と異なり、ここにはビルボの視点が導入されていることだ。彼にとってみれば宝への執着はやはり単純に貪欲さでしかなく、従ってトリンのプライドを理解できない彼は、自身の宝の分け前を犠牲にしつつ、アルケンストンを交渉の道具として使えるようバードに託す。彼の行動はガンダルフによっても賞賛されるものである。ドワーフが貪欲さ、愚かしさの為に勇猛になることは、容易に信じられることでもあるが、それが純粋に高貴さと共に扱われていないことは、ビルボが一連の出来事にコミカルなタッチを加えていることに明らかである。ドワーフはいまだ英雄性を完全には回復していないのだ。

黄金をめぐる貪欲さだけでないドワーフの側面は、竜の死という偶然によって明らかになったことに触れたが、同様に彼等の武勇精神の顕示もある種の偶然、即ち湖の人間・エルフ・ドワーフ対ゴブリン・ワグによる五軍の戦いによって示されることとなる。この戦争は突如として起こり、黄金をめぐる「醜い」諍いに終止符を打った、言わば「幸福な」偶然と数えられるものであるかもしれない。しかし五軍の戦いがその実完全な偶然でないことも、ガンダルフがこの戦争が発生する可能性を知らながら阻止しなかった事実によって提示されている。⁶語り手は、魔法使いが闇の森の手前で一旦一行から離れた理由を、ビルボが自身の美点を前景化させられるように、と想像しており (227)、彼がドワーフに対しても同じことをした可能性は十分に考えられる。つまりガンダルフは、この時山の王として相応しくない行動をとっているトリンに、⁷その武勇心をみせる機会を与える為あえて戦争を阻止しなかったのである。

ゴブリンとドワーフの間には古い因縁があり、故郷のこの地に侵略してきたゴブリンと戦うことは、ドワーフにとって、種族としての誇り、及び家を

⁶ 直接的には、ゴブリンの襲撃は霧の山脈での恨みに端を発しているとの説明によって、この戦争の蓋然性は保証されている。

⁷ 黄金の為籠城し、かつアルケンストンを盗んだ罪でビルボを追い出す欲深いトリンに対しガンダルフは述べる“You are not making a very splendid figure as King under the Mountain, [...] ‘But things may change yet’ (335)。

守る為に戦うことだと言える。このようにドワーフの武勇が示されるべき機会においてビルボの視点が再び消失している点は注目すべきである。彼はまず指輪の魔力によって戦争の只中から少し離れた場所へと移動し、物語の焦点からフェードアウトする。更にこの時五軍の戦いについて彼が後に抱く感想が予め挿入されている点は興味深い“*It [the Battle of the Five Armies] was a terrible battle. The most dreadful of all Bilbo’s experiences, and the one which at the time he hated most— which is to say it was the one he was most proud of, and most fond of recalling long afterwards, although he was quite unimportant in it*” (341)。自身が活躍していないのにプライドを持つということにビルボに対する皮肉が感じられるかもしれない。しかしここでより重要なことは、それまで英雄の存在や戦いに懐疑的であったビルボが、この戦いに好意を寄せるようになることが戦争描写のはじまりの段階で言われていることだ。この後ビルボは姿を消し、物語は竜退治の時と同じように淡々と戦いを語っている。

ゴブリンの圧倒的な数の多さに味方が絶望的な戦いを強いられている場に、竜城をやめ援護に現れたトリンの姿は、作中最も偉大な場面を作り上げる。

Suddenly there was a great shout, and from the Gate came a trumpet call. They [the friends] had forgotten Thorin! [...]. Out leapt the King under the Mountain, and his companions followed him. [...] they were in shining armour, and red light leapt from their eyes. In the gloom the great dwarf gleamed like gold in a dying fire. (343)

恐らくはそれまでの勇猛心の欠如故に、戦争における一戦士としてみなされていなかったトリンが、突如武装して現れた時の味方の驚きは引用の「⁷」によくあらわれている。ここでのトリンの行動は「勇気の理論」の体現だと言える。⁸また些か踏み込んだ見方をするならば、「消えかけた火に映える黄金のよう」だという表現は、火竜が宝の上にいる姿を連想させるものでもある。トリンはようやく竜のもとにやってきたのだ。

⁸ 正確に言えば、ここでの「勇気の理論」の体現も、味方の最終的な勝利に終わっている点など、中途半端さは拭えない。しかし後述するように、トリンがこの戦いで戦死することは、敗北を前提とする絶望的状况が確かにあったこと、それに対して彼が自身の意思を貫いたという点で、「勇気の理論」の少なくとも一表現だとは言えよう。

この時点で彼の英雄としての曖昧さは解消されたと言えるのだが、ここにおいてビルボの懐疑心もまたクライマックスを迎えていることは見逃せない。一度物語からフェードアウトしたはずのホビットは、再びその中心に戻る。彼はこの絶望的な戦争の状況を眺めながらコメントする。

“It will not be long now,” [...], “before [...] we are all slaughtered or driven down and captured. Really it is enough to make one weep, after all one has gone through. [...] I have heard songs of many battles, and I have always understood that defeat may be glorious. It seems very uncomfortable, not to say distressing. [...]” (344-45)

この発言は「勇気の理論」が賞賛される作品についてのメタ表現と言えるものだろう。⁹実際の戦闘に身を置く者が、味方が殺されてゆくを見て気分が良いはずがないのは当然だが、敗北もまた偉大であるとする歌の精神への揶揄や皮肉がここにみとれる。尚且つビルボのこの不信感を後押しするように、彼は、ガンダルフを助けた時同様、鷲達が救援にやってくるのを目撃する。

しかしビルボは、今回は石が当たり気絶することで、またもやこのエピソードから消失してしまう。彼が目覚めた時に会おうのは、鷲のおかげで大勝利を取めた光景ではなく、戦争後の陰鬱な状況、及びトリンの死だ。トリンの死に直面した彼は、自身が「終わりがこんなだとは泣けてくる」と皮肉をもって語った行動を、実際に本当の涙を流すという異なる仕方において実現することになる。共に旅した仲間の死に涙するのは当然であるし、彼の涙の理由は彼の優しさであるとの説明があるのだが、同時にこのことは、敗北を許容する精神が、見る者に与える影響の事実を示してもいるだろう。

⁹ Anderson はビルボの発言に関し、トールキンが通学していた the King Edward's School の校歌に対する言及の可能性の指摘を受けたことがあると付している。これはこの発言を必ずしも「勇気の理論」と結びつける必要性のないこと、あるいは「勇気の理論」と類似の精神が必ずしも古典作品にのみみられるものでないことを証明するものでもあり得るかもしれない。しかしもとを辿れば北欧古典がそのはじまりの一つに数えられることは、この精神を英雄の一つの特徴としてみることに妥当性を付与しているだろうし、本作における二項対立を考えるならば、この発言に、叙事詩の世界観への言及を読み取ることも不自然ではないだろう。

“I [Bilbo] wish Thorin were living, but I am glad that we parted in kindness. You are a fool, Bilbo Baggins, and you made a great mess of that business with the [Arken]stone; and there was a battle, in spite of all your efforts to buy peace and quiet, but I suppose you can hardly be blamed for that.” (348-49)

ビルボが結果的に述べるこの台詞は、彼が、自身の持つ価値観とは別の価値観を認めたことをあらわしているようだ。彼はトリンが生きていてくれた方が良かったと望む反面、彼の死に単に悲惨というだけでないものを感じたからこそ互いに満足して別れられたのである。ビルボはまた黄金についてのドワーフの執着にも自分の理解を超えたものがあったことを認識している。彼が自身を愚かだと述べるのは、直接的には平和を求める彼の行動が徒労に終わったことを指してのことだが、同時にそれは自分の考えの及ばない領域に手を出し余計な混乱を招いたことに対しての発言でもあるだろう。ビルボは確かにこの戦争が起きたことに責任はない。しかしガンダルフには多少ある。恐らく魔法使いが望んだように、ドワーフはここで自身の英雄性に関する曖昧さを完全に解消してみせ、彼等に対するビルボの評価に変化を与えたのだ。

ビルボのこの発言の後、彼が気を失っていた間何があったかという戦争の描写が再び淡々となされる。最終的には（ドワーフの中でも特に印象深い）フィリとキリがトリンを守って死んだことも明かされる。現実の読者の反応は正確に予測できるものではない。しかし少なくとも、登場人物達の英雄性が段階を経て純粋に提示されていくのと連動して、「読者」の代表たるビルボが考え方を変えていることは重要である。彼が英雄の世界観を認めるのと同時に、残された者達は改めて国の再建を始める。山の下に置かれたトリンの墓にはエルフ王よりオークリストと、バードよりアルケンストンが戻され納められた。このことは、武勇精神と高貴な誇りとしての貪欲さが、どちらも英雄トリンの属性であることが認められたことを象徴するものだろう。ここに帰還を求めて奮闘するドワーフについての叙事詩が完成されたのである。

結

ビルボの現代的な視点を中心に置き、『ホビット』は英雄の空虚さを暴いて

みせる。ドワーフが宝に貪欲なことは容易に信じられても、それが誇りに繋がること、また彼等がたとえ自身の家の為であろうと強大な敵に立ち向かうこと、そのような「英雄的な」行為などあり得ないことなのだ。彼等は「家」をめぐる曖昧な態度をみせ、現代的な価値観によって歪んだ英雄像を提示する。しかし結末部において彼等は、偉大な英雄としての側面を徐々に示すことを許されている。竜退治においては一人の英雄の戦いが擲擲されることも歪められることもなく描写される。ドワーフもまた黄金をめぐる諍いの最中、自身の貪欲さが高貴な誇りあるいは「家」のイメージと結びつくことを仄めかし、最終的には五軍の戦いにおいて「家」の為に戦い死ぬことで叙事詩的英雄として武勇心をも証明してみせていると言える。ビルボは、彼等が曖昧でない英雄性を開示していく過程で、彼等の世界観を認め始める。ここに、一人の現代人に対する、英雄または叙事詩の世界観の立場の回復が確認でき、この変化が、ドワーフが伝説的な国を建て直すことに象徴されているのである。ドワーフ達はきっと国を繁栄させるはずである—故郷を奪われ偉大な叙事詩がそこから生まれる日が再び来るかもしれないとしても。

参考文献

- Auden, W.H. "The Quest Hero." Isaacs and Zimbardo 40-61.
- Carpenter, Humphrey. *J.R.R. Tolkien: A Biography*. London: Harper, 2002.
- Flieger, Verlyn. "Frodo and Aragorn: The Concept of the Hero." *Tolkien: New Critical Perspectives*. Ed. Neil D. Isaacs and Rose A. Zimbardo. Lexington: The UP of Kentucky, 1981. 40-62.
- . *Interrupted Music: The Making of Tolkien's Mythology*. Kent: The Kent State UP, 2005.
- Flieger, Verlyn, and Carl F. Hostetter, eds. *Tolkien's Legendarium: Essays on the History of Middle-Earth*. Westport: Greenwood, 2000.
- Frye, Northrop. "First Essay: Historical Criticism: Theory of Modes." *Anatomy of Criticism: Four Essays*. Princeton: Princeton UP, 2000. 31-67.
- . *The Secular Scripture: A Study of the Structure of Romance*. Cambridge: Harvard UP, 1976.
- Gasque, Thomas J. "Tolkien: The Monsters and the Critters." Isaacs and Zimbardo 151-63.

- Goldstein, Lisa. "The Mythmaker." *Meditations on Middle-Earth: New Writings on the Worlds of J.R.R. Tolkien*. Ed. Karen Haber. London: Simon, 2003. 185-97.
- Isaacs, Neil D, and Rose A. Zimbardo, eds. *Tolkien and the Critics: Essays on J.R.R. Tolkien's The Lord of the Rings*. Notre Dame: U of Notre Dame P, 1968.
- Lodge, David. *The Art of Fiction*. London: Penguin, 1992.
- Ready, William. *Understanding Tolkien and The Lord of the Rings*. New York: Warner, 1969.
- Shippey, Tom. *The Road to Middle-Earth: How J.R.R. Tolkien Created a New Mythology*. Revised and Expanded ed. New York: Houghton, 2003.
- Thomas, Paul Edmund. "Some of Tolkien's Narrators." Flieger and Hostetter 161-81.
- Tolkien, J.R.R. *The Annotated Hobbit*. Annotated by Douglas A. Anderson. Revised and Expanded ed. London: Harper, 2003.
- . "Beowulf: The Monsters and the Critics." *The Monsters and the Critics and Other Essays*. Ed. Christopher Tolkien. London: Harper, 2006. 5-48.
- . *The Letters of J.R.R. Tolkien*. Ed. Humphrey Carpenter. Boston: Houghton, 1981.
- . *The Lord of the Rings: Part 1 The Fellowship of the Ring, Part 2 The Two Towers, Part 3 The Return of the King*. London: Harper, 2007.
- . "On Fairy-Stories." *Tree and Leaf*. London: Harper, 2001. 1-81.
- . *The Silmarillion*. Ed. Christopher Tolkien. London: Harper, 1999.
- . "Smith of Wootton Major." *Smith of Wootton Major and Farmer Giles of Ham*. New York: Random, 1969. 7-59.
- Walker, Steve. *The Power of Tolkien's Prose: Middle-Earth's Magical Style*. New York: Macmillan, 2009.
- West, Richard C. "Túrin's *Ofermod*: An Old English Theme in the Development of the Story of Túrin." Flieger and Hostetter 233-45.
- Wright, J. Lenore. "Sam and Frodo's Excellent Adventure: Tolkien's Journey Motif." *The Lord of the Rings and Philosophy: One Book to Rule Them All*. Ed. Gregory Bassham and Eric Bronson. Popular Culture and Philosophy 5. Chicago: Open Court, 2003. 192-203.
- 赤井敏夫 『トールキン神話の世界』 人文書院、1994 年。
- 真銅正宏 『小説の方法』 萌書房、2007 年。